

《資料》

日本の教育史における生徒指導と生活指導

Student Guidances in the context of Japanese Education History

筑波大学教育学系 早坂 淳
Jun Hayasaka

はじめに

文部科学省が実施した調査¹⁾の結果によると、対教師暴力、生徒間暴力、対人暴力、器物損壊を含めた児童生徒による暴力行為の発件数は、調査開始以来過去最高の件数を記録した2007(平成19)年度の5万3千件をさらに上回り、約6万件を記録した。

児童生徒による問題行動の増加傾向を背景にして、新学習指導要領には児童生徒の規範意識を醸成する必要性が明記され生徒指導のさらなる充実が謳われている。

このように、生徒指導とは、その充実化を通して現在の教育実践の場面で生じる諸問題を解決しようとする際に頻繁に言及される教育用語のひとつである。また、生徒指導は学校教育実践の場面においても中心的な概念として捉えられている。このことは、各学校が学校全体の生徒指導体制の整備を司る生徒指導部を設置しており、生徒指導主事/主任が学校運営において中心的な役割を担うことになっていることから窺えよう。

生徒指導が学校教育の文脈において主要な概念である一方で、生活指導という教育用語もまた存在する。生徒指導部と生徒指導主事/主任に代わって生活指導部と生活指導主事/主任を学校に設置している地域もある。しかしながら、これらの用語は必ずしも厳密に使い分けがなされているとはいえない。多くの場合、生活指導という用語は、生徒指導と同義の文脈で用いられている。生徒指導と生活指導との概念的相違を意識せずに用いた

場合、時としてその用法上の混同は教師や研究者間での生産的な議論の妨げになるおそれがある。

よって本資料は、生徒指導と生活指導という教育用語について、その概念上の相違の確認をその目的とする。その際に、生徒指導と生活指導という教育用語を、日本の教育史の文脈に照らして論じることで、その誕生の起源からそれぞれの概念の相違に迫ろう。

1 戦前の教育史における生活指導

日本の教育史において、用語の誕生がより早いのは生活指導である。この用語が学校教育の文脈で初めて用いられたのは1920年代(大正10年代初期)であり、当時注目を集めていた綴方教育の中に「表現のための生活指導」²⁾として登場したのを嚆矢とする。綴方教育とは、いわば作文教育であり、日本の近代学校制度が成立した当初から教科として存在していた。

第一次大戦後に国際的な民主主義運動や労働運動が発展するのに伴って教育改革運動が各国で盛んになり、わが国も「大正自由教育運動」として学校教育において民主主義的思想が広がりを見せた。その流れの中で、子どもの綴り方表現の母胎として子どもの生活が捉えられるようになり、これらを背景として、旧来の管理主義的な教育に異を唱える立場を確立した綴方教育は生活指導と密接な関係を築くことになる。郷土教育、振興教育、綴方教育等を旗印に発展を見せた生活指導は、教育思想的には、天皇制教育とそれに基づく修身教育体制に対する闘いの中で注目を集めた児童中心

主義教育の影響を強く受けているといえよう。

このような教育史的背景のもとで誕生した生活指導であったが、天皇を教育の出発点にも帰着点にもしないことを理由に、その教育思想は昭和時代前期において台頭した国家主義的・軍国主義的教育によって弾圧され、一時終息を迎えることになる。

2 戦後の教育史における生活指導

敗戦は我が国の学校教育に再び民主主義的生活指導の発展を可能にした。戦後の生活指導は、児童会・生徒会の結成、生活教育の流れに立つ諸運動、諸外国の教育思想や教育実践の紹介、そして綴方教育が生活綴方教育として復活をみせた流れにおいて活発化した。1950年代から60年代にかけて、子どもの実生活に根を下ろした作文指導実践としての生活綴方教育は、集団的な話し合いや自由に子どもの認識・思考を出し合うといった手法によって全国の教師たちに広く受け入れられた。生活綴方教育は、戦前の綴方教育が重視していた子どもの生活の向上を目指す姿勢をさらに強めていたため、当時の生活指導は民主的な手法によって行われていた。

このように学校教育の文脈で発展を見せた生活指導は、同時に、学校教育以外でも—たとえば行政当局、企業、団体、個人等によって—広く用いられるようになる。しかしながらそこでの生活指導が意味したのは、むしろ管理主義的・労務管理的な生活指導であり、学校教育におけるそれとは概念上大きな隔たりがあるものであった。生活指導という用語が教育界だけではなく広く一般に用いられるようになったことで、この時点で既に、その概念は多様なものとなっていた。

3 戦後教育史における生徒指導

1958(昭和33)年に改定された学習指導要領は、行政当局からの教職員ならびに児童生徒に対する管理主義傾向を強く打ち出した内容となった。文

部省(当時)はそれまでは生活綴方教育を中心として行われてきた生活指導だけでは道德教育は不十分だとして、新たに道德の時間を特設した。時期を同じくして、これまで用いられてきた生活指導という用語が広く用いられすぎていることを理由に、学校教育において児童生徒一人ひとりの課題に具体的に対応し健全な人格形成を目指した教育実践として、新たに生徒指導という用語を用いるよう行政指導がなされた。文部省によるこの行政指導は、行政主体で進められる管理主義的教育に反発する教師たちへの「踏み絵」であるとの批判³⁾もある。

生活指導が教育実践の場面から実践家たちの教育的思想や理念をもとに誕生した用語であるのに対して、生徒指導は行政主導で生み出された用語なのである。とはいえ、確かにその概念が広範化しすぎた生活指導を改めて、学校教育に新たに生徒指導という用語を導入したことによっていくつかの意義を見出すこともできる。

第一に、生徒指導は生活指導よりも理論化が容易であるといえる。生活指導はこれまで学内外にわたっての実践が望まれていたために、生活指導と称される教育実践の範囲は広範であった。また、教師間における情報の共有も困難であった。それゆえに生活指導の発展は主として教育実践家各自の経験の蓄積に頼らなければならなかった。その一方で、生徒指導は教育実践の具体的な場面に限定されており、教育実践家の省察やそれを通じた理論化が比較的容易になったのである。これまで心理学におけるケア理論を中心として様々な研究が生徒指導の理論的解明を行ってきた。

第二に、生徒指導がその場面を学校教育に限定していることによって、教師の過剰な労働を抑止することが期待される。教師のありとあらゆる言動に「指導」というマジックワードが付されてしまうと、教師の労働は必ず過剰になる。その結果として心身ともに疲弊しきった教師が子どもたちの健全な人格形成を涵養することは非常に困難であると言わざるを得ない。精神疾患が原因で休職・退職する教員数の近年まれにみる増加は、過剰な

労働を教師に課してしまう社会風潮に一つの原因があるのではないだろうか。学校に過剰に集中している教育を家庭や地域に戻してゆくためにも、限定的な意味で用いられる生徒指導は現代の学校教育の場面において適切な用語といえよう。

おわりに

本稿では、日本の教育史から、生徒指導と生活指導について、その誕生及び発展の経緯について概観してきた。冒頭で指摘した通り、生徒指導と生活指導の用いられ方には多く混同がみられるのが現状である。本稿は、現代の学校教育が抱える問題についてわれわれが考える際に避けて通れない二つの概念の相違を確認することで、教育学的議論が生産的に、かつ活発的に行われることを望むものである。

註

- 1) 文部科学省 (2008) 「生徒指導上の諸問題」
- 2) 峰地光重 (1922) 『文化中心綴方新教授法』教育研究会 (『峰地光重著作集1』 (1981)、けやき書房所収)
- 3) たとえば、城丸章夫 (2003) 「生活指導」浪本勝年他編 (2003) 『現代教育学事典』労働旬報社所収、p.470)
- 4) もちろん生活指導の理論的検討も国分一太郎、宮坂哲文、小川太郎、大田堯などによって行われてはいる。しかしながら、これらはどれも綴方教育実践の整理にとどまり、理論的な解明までには至っていない。